

ティーチングポートフォリオ

東北生活文化大学家政学部家政学科服飾文化専攻

教職課程センター

講師 永田 和寛

1. 教育の責任

教職課程センターの一員として、教職課程の編成の一端を担うとともに各授業を担当している。教職課程では、主に中学校教諭一種免許状（家庭・美術）、高等学校教諭一種免許状（家庭・美術・工芸）、栄養教諭一種免許状等の取得を目指す学生の指導を行っている。担当科目は以下のとおりである。

授業科目	学部・学科・専攻	資格
教育相談	家政学部家政学科・美術表現学科共通	教職
栄養教育実習事前事後指導	家政学部家政学科健康栄養学専攻	教職
教職概論	家政学部家政学科・美術表現学科共通	教職
教育実践演習（栄養教諭）	家政学部家政学科健康栄養学専攻	教職
教職実践演習（中・高）	家政学部家政学科・美術表現学科共通	教職
栄養教育実習	家政学部家政学科健康栄養学専攻	教職
教育実習Ⅰ（事前・事後指導を含む。）	家政学部家政学科・美術表現学科共通	教職
教育実習Ⅱ（事前・事後指導を含む。）	家政学部家政学科・美術表現学科共通	教職
専門研究Ⅰ	家政学部家政学科服飾文化専攻	

授業以外にも、教職に関する各種ガイダンスの実施や教員採用試験受験者に対する個別指導や、教職課程ポートフォリオをとおして教職課程履修者の学修の状況を適宜把握し、必要に応じて個別相談等の対応を行っている。このように、教職課程センターの一員として所属する学科の学生に対する指導だけではなく全学の学生の教職課程に対する責任を担っている。

2. 教育の理念

私が教職課程の授業づくりにあたって大切にしていることは、学生が安心して教育実習に臨んだり、教職を目指したりできる環境づくりである。教員の志望者の減少に伴って教員不足が社会問題化している現状は、少なからぬ学生に対して教職に対する不安を抱かせるものである。こんにちの教職課程の授業づくりは、第一にこうした不安にしっかりと向き合い、これを授業づくりの起点とすることが重要である。他方、教職課程の課題として既存の教育理論や教育政策の紹介に留まってしまうことが挙げられる。こうした課題を踏まえて、

教職課程で伝えるべき知識や技能を生きたものにするには、知識や技能が学生それぞれの教職に対する不安に対してどのような意味を持つのかという問いを軸とした授業づくりを進めていく必要がある。その意味で、学生の「安心」を目指した授業づくりは、単に知識や技能を教授するだけではなく、教授したそれらが学生にとってどのような意味を持ち、いかにしてかれらの態度形成に資するものとなるのかまでをも射程に入れた試みになりうるものであると考えている。

3. 教育の方法

教職課程においては、一方向的に知識を詰め込もうとするのではなく、まずそれぞれの学生の学校体験のリフレクションを丁寧に行うことを重視している。それぞれの学生が抱いている「先生」の仕事に対するイメージを深掘し、そのなかから授業の課題を引き出すためである。教員に求められる資質・能力は、知識や技能に留まらず態度にまで及ぶものであるため、こうした教授方法の工夫は欠かせない。

むしろ、教授をしないわけではなく、リフレクションから引き出された課題を深めるために視点を積極的に教えることも重視している。ただし、その際にも教授した事柄が学生たちの課題に対してどのような意味を持つものであったのかについての形成的評価を行うために、グループワーク等の活動を積極的に取り入れてそれぞれの学生がアウトプットする機会を十分に確保する。例えば、「教育相談」の授業では、教育相談の分掌を任された際に職員室の各教員に教育相談のために必要な知見を伝える資料づくりをパフォーマンス課題として実施している。授業で取り扱った知見の意味を、教育現場で「使える」かたちでアウトプットすることをとおして、それぞれの学生が見出すことを目指しているわけである。こうしたインプットとアウトプットの往還をとおして、学生の態度形成に資する授業づくりを行っている。

その他に特に重視している教育の方法は、個々の学生との対話である。これを大人数の講義においては実現すること簡単ではないが、グループワーク等を実施することによって学生それぞれと近い距離で接することでかれらの思考を肌で感じ、より適切なフィードバックを行うことができるよう努めている。

4. 教育の成果

担当した授業について、授業評価アンケートでは、総合評価が4.59点（教育相談）、4.84点（教職概論）であった（5点満点）。また、自由記述について、授業の形式に関しては、グループワークを多く取り入れたことを肯定的に受け止める意見がある一方で、グループワークが多すぎることを指摘する意見もあった。また、講義の内容については、学校現場で生じうる葛藤を語った内容について興味関心を抱いたという旨の解答があった。令和6年

度は対話的な学びの実現を図るためにグループワークを多く取り入れたが、こうした結果を受けてより効果的な授業方法を練り直していく必要がある。

なお、本学における指導は初年度であったがいずれの授業においても学生たちの高い学修意欲や深い思考から担当者として学ぶところが少なくなかった。こうした学生たちがさらなる高みにステップアップすることを助成するための方法を考えていきたい。

5. 今後の目標

（長期的目標）大学における教員養成の固有の意義の明確化

近年、教員研修制度の充実が図られつつある一方で、大学における教員養成課程の固有の意義が問われている。大学ならではの、大学でしかできない学びの在り方を模索することを長期的な目標として取り組んでいきたい。具体的な方向性としては、学校への適応を目指すことに偏するのではなく、研究機関としての大学の性格を踏まえて学校の在り方そのものを問い直したり相対化したりすることを大学における教員養成の固有の意義として打ち出していくことが必要であると考え。

逆説的ではあるが、そのためにこそ教職課程は学校現場との連携を充実させていく必要があると考えている。そのことによってはじめて教職課程で教授する知見（理想）と学校現場における知（現実）との間に生じる葛藤が顕在化するからである。学生たちをこうした葛藤のなかへと誘い——OJT では許されない、多くの間違いを許容しうる、ゆっくりとした時間のなかでこそできる——ありうべき学校のあり方を思考していくことが、大学ならではの「贅沢さ」のある教職課程の意義の一つであると考えている。こうした考えのもと、学校現場との連携を踏まえて真に「現場で生きる」教職課程カリキュラムの設計を目指したい。

（短期的目標）教育実習の充実

教育実習は、これまで教職課程の集大成であり、教職を志望する学生の職業選択の場として期待されてきたといえる。その一方で、教員免許状の取得を希望する一方で卒業後は必ずしも教職を志望するわけではない学生が教育実習にどのように向き合うべきかが問われてきた。こうした学生を含めて、教育実習をどのような学生にとっても実りのあるものにするためには、これを単に集大成や職業選択の場として捉えるのではなく、（本来の主旨からすれば当たり前のことではあるが）教育活動として捉え直すことが必要である。例えば、教育実習を教壇に立つという経験をとおしてそれぞれの学生が自分のあり様を探究し、再発見する機会とする。すなわち、単なる通過儀礼として教育実習を捉えるのではなく、新たな発見の場としてこれを捉え直し、教育実習を誰にとっても実りのあるものにできないかと考えている。こうした新しい教育実習を実現するための授業改善に取り組んでいきたい。